

沼津市

# 明治史料館通信

2000. 10. 25 (季刊 年4回発行) Vol.16 No.3 通巻第63号



沼津小学校体操教授方辞令  
(山口渚氏所蔵)



沼津学校三等教授方並辞令  
(山口渚氏所蔵)

シリーズ

沼津兵学校とその人材 58

## 沼津兵学校体操教授 山口知重

一部の著名人を除き、沼津兵学校関係者には、いまだ経歴不詳の人物が少なくない。しかし、毎年少しずつ新たな発見がある。最近判明した例が以下に述べる山口知重である。

山口知重、旧名朴郎。嘉永三年十一月十六日、江戸の生まれ。養父は幕臣山口万次郎。実父山口忠助は武士ではないらしい。幕末までの履歴上注目すべきは、元治元年（一八六四）三月から武田成章に英語、慶応二年（一八六六）から貝塚道次郎に化学を学んだことである。武田は五稜郭の設計者と

して知られる洋学者、貝塚は開成所の化学教授手伝出役だった人物。山口が早い時期に英語や化学を学んだことは、後の人生を決定したといえる。

戊辰に際しては大川正次郎（矩文）率いる伝習歩兵隊の頭取として箱館戦争を戦ったが（丸毛恒「函館戦史」「旧幕府」他）、そのことは、明治期に作成された公務上の履歴書には当然ながら記されていない。箱館降伏後、静岡藩に帰する前の幽閉中のことであろうか、明治二年（一八六九）には同じ脱走軍参加者である山内提雲（六三

郎）に英語・数学を学んでいる（「学業履歴」）。弘前の最勝院で謹慎生活を送ったらしい。

降伏者の赦免と静岡藩への引き渡しは明治三年（一八七〇）四月のことだったが、果して山口だけが一足早く釈放されたということがあったであろうか、「履歴ノ略」をはじめ、残存する何種類かの自筆履歴書によれば、二年五月より

五年二月まで「沼津兵学校ニ於テ英語数学ヲ学フ」とある。しかし前掲「学業履歴」には、明治三年から沼津兵学校で学んだと記されており、史料間に矛盾がある。

沼津小学校（兵学校附属小学校）の体操教授方を命じる辞令は七月八日付で出されているが、これはどう考えても明治三年のものではないだろう。もう一通の、兵学校附体操教授方に任命し、一か年御手当六十兩を支給するという辞令はさらにその後のものか。いずれにせよ沼津では教えながら学んだということになる。

なお、箱館帰りであることが政府に憚られたためか、それとも就任が名簿作成より遅れたためか、

静岡藩の職員名簿「静岡御役人附」（明治三年）に彼の名前は掲載されていない。箱館では歩兵頭として伝習士官隊を率いた本多忠直（幸七郎）も兵学校体操方教授に就任しているが、やはり名簿に名はない。

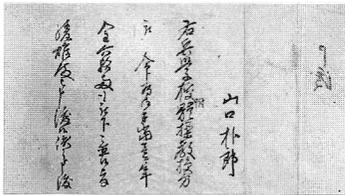
沼津兵学校の体操は、日本の学校体育の先駆であり、教授陣の中にはその後も体育に従事した者もあったが、山口の場合は一時的に担当しただけだったようだ。

明治四年（一八七二）正月十二日には沼津学校三等教授方並に進んだ。同年十二月三日には、兵学校の政府移管のため、兵部省より陸軍少尉の辞令を受け、兵学校からは二等少尉と心得るべき旨を申し渡された。しかし、上京はせず、沼津出張兵学寮に勤務し、残留した生徒たちを教えたいらしい。なお、同僚の本多も少尉になっている。翌明治五年五月四日には出張兵学寮の廃止（東京本校への統合）に伴い陸軍少尉を免ぜられた。

職を失った山口は、洋学修業のため、家族を沼津に残し、同年七月二日沼津を出立した（「寄留奉願



山口知重  
(山口渚氏所蔵)



沼津兵学校附体操教授方辞令  
(山口渚氏所蔵)

候覚)。なお、沼津での住所は「第拾四区式百五拾三番屋敷」となっている(別の履歴書には片端町五十番地とある)。東京では同月より旧幕臣坪井玄達に英語・物理・化学を学んだ。

再び官途に就いたのは七年(一八七四)七月五日のことであり、陸軍兵学寮十二等出仕であった。

箱館・沼津でいっしょだった本多忠直は武官の道を選んだが(後歩兵大尉)、山口は文官に転じたのである。以後三十二年(一八九九)

八月に退職するまで陸軍に奉職、

一時砲兵工廠で仕事をしたほかは、長く士官学校・幼年学校等で物

理・化学担当の教官をつとめた。

教鞭をとるかたわら、フランス軍

事顧問団の工兵大尉カロツパン、

同クレットマン、砲兵大尉シヤル

ウベーらの助手を兼ねて、物理・

化学を研究した。

退官後、明治三十年代には、東

京で石鹼製造所を開業したり、神

奈川県立高等女学校・神奈川県師

範学校で教鞭をとったりした。

亡くなったのは大正十年(一九

二一)十月二十日である。

## ぬまづ近代史点描 ④5 煎茶道と沼津・原の文人たち

喫茶法のうち、茶葉を湯で煎じ出すやり方は、抹茶法よりも古くからあったが、それが改めて中国から日本に入ったのは江戸初期、僧隠元が黄檗宗を伝えたのと期を一にするという。江戸中期には、やはり黄檗宗の僧高遊外(売茶翁)によって、煎茶文化が広められ、池大雅・上田秋成・田能村竹田・木村兼葭堂ら文人がその流行に一

役買った。茶を賞味しながら書画・詩文・管弦をもてあそぶというスタイルが受け入れられたのである。近世中期以降、文人の多くは煎茶文化の影響下にあったといえる。

やがて抹茶に倣った規法が生み出され、家元も出現、煎茶道が確立されていった。

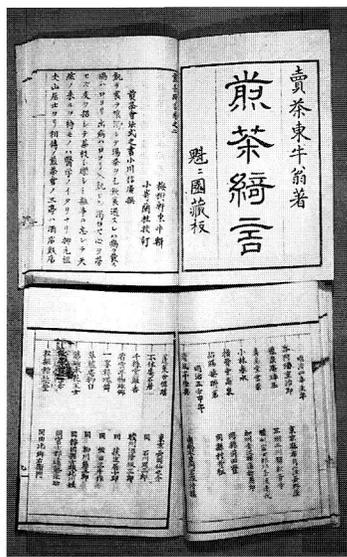
抹茶に比べて簡便で自由な煎茶は、茶の増産とも相まって民間に広く普及するようになった。沼津のような地方にも、文化の流通ル

トでもあった東海道を通じてそれが伝えられたといえる。

高遊外から売茶翁の号を継承した三代目に、梅樹軒売茶東牛(魁々園)という、寛政三年(一七九二)

京都生まれの茶人がいた。その売

茶東牛の著書に、『煎茶綺言』(当館蔵・原渡辺八郎家文書)がある。



売茶東牛著『煎茶綺言』  
(渡辺八郎家文書S-11)



坂三郎  
(坂周治氏所蔵)

第一巻には、全国各地にいた彼の門人たち八十二名の名前が列挙されているが、実にそのうち四十名が現在の静岡県下の人々であった。以下がその顔触れである(原本記載順)。

- |         |           |
|---------|-----------|
| 帯笑園蘭丘   | 駿州原宿植松氏   |
| 小野春柳    | 遠州横須賀三川屋  |
| 渡辺六三郎   | 豆州三島駅釜屋   |
| 芙蓉通仙楼不羨 | 駿州静岡三階屋   |
| 世福堂隻泉   | 同州岡部駅杉山氏  |
| 花瓢庵其遊仙史 | 駿州静岡藩大久保氏 |
| 桃林堂花鳥女史 | 同姓室       |
| 山曉楼石柱   | 同姓男       |
| 盛雪楼暉翠   | 静岡藩宇津氏    |
| 有無庵白鷗   | 同藩斎藤氏     |
| 貯月楼池泉   | 静岡呉服町池川屋  |
| 暮雪庵暖雲   | 同町藤枝屋     |
| 雀舌堂湘雨   | 静岡小倉平左衛門  |

- 柏園龍仙女史 芙蓉通仙楼女
- 通仙楼得女史 同次女
- 山遊堂一劑 静岡藩神谷氏
- 同花秀女史 同神谷氏女
- 松籟舎暖香 静岡藩永井氏
- 睡茗洞槐僊 遠州三方ヶ原住阿久沢賢
- 帶笑園蒲洲 駿州原駅植松与右衛門
- 新庄可野 同通仙楼男
- 松永登志女史 同州富士郡平垣村
- 梅子亭花染女 史駿州静岡花瓢庵女
- 小野横塘 遠州横須賀三河屋
- 青山陶々庵 同中泉松田屋
- 德聚洞翠嶺 静岡藩内藤享一郎
- 真息堂雲景 駿州富士郡比奈渡辺氏
- 千株堂翠香 駿州沼津坂三郎
- 看雲亭物琢卿 同荻生居十郎
- 一峯楼塊僊 同依田三千作
- 草爐庵柳白 同柳川熊五郎
- 藤廼本花友女 同静岡県土族北川姓
- 欽峯楼一茶 同富士郡遠藤采助
- 松榭館執堂 同由比郷右衛門
- 僧東梁 駿州原駅德源寺
- 渡辺耕星 同通称常治郎
- 松永晚翠 同富士郡平垣村安彦
- 島崎竹女 同松岡村貫一郎娘
- 益田守拙 同原駅天野屋五郎作
- 堀覚女史 同沼津駅江戸屋娘

この門人録は明治六年（一八七三）までのものらしいが、本県関係のうち三分の一ほどが静岡藩士（旧幕臣）とその家族である。残りが駿遠豆の百姓・町人の煎茶家たちということになる。沼津市域の人物は十名である。

最も古くからの門人は、原宿の素封家植松蘭丘（与右衛門季敬・学山）であろう。息子の蒲洲（与右衛門季服）は明治三年（一八七〇）の入門らしい。売茶東牛は、名園帯笑園で知られる同家にたびたび立ち寄ったようで、蘭丘の日記『原宿植松家日記・見聞雜記』には以下のように登場する。「此日売茶老人被參一泊（中略）夕方望嶽亭にて売茶老人一同酒を出し」云々（嘉永六年六月四日）、「坐敷ニおゐて煎茶有之、売茶老人之手前也」（同五日）、「売茶老人発足茶托之代金壹分式朱外ニ茶入調具候様金壹分也相渡申候」（同六日）、「売茶老人平垣より被帰一泊」（同年八月三日）、「売茶老人滞留也」煎茶稽古致候」（同四日）、「売茶老人江戸江発足」（同五日）、「売茶老人も久々にて大坂より被參此度帰府之由一泊被致候」（嘉永七年十月十七日）。

ちなみに平垣村の松永家は植松家とは姻戚であり、ともに売茶東牛に師事していた。由比郷右衛門や比奈の渡辺氏も姻戚である。

坂・荻生・依田・柳川は明治五年、徳源寺・渡辺・益田・堀覚女史は六年の入門らしい。

坂家は、代々江戸屋の屋号で知られた沼津上土町の茶商。坂三郎（一八四四〜一九二二）は社長江原素六の下で積信社に参画、茶の輸出事業を推進し、その後も県会議員・茶業組合中央会議員などを歴任した沼津の代表的茶業功労者。千株堂の屋号は、千本浜の松に因んだものであり、自家製の茶銘にも千本山・雪の松・愛鷹の爪などと命名したという（『静岡県駿東郡茶業史』）。茶を商うだけでなく、自ら茶道を嗜んだ。彼の略歴には「売茶翁に従ひて煎茶を学ぶ」其蘊奥を極む」と記されている（『岳陽名士伝』）。

荻生居十郎（方泰、一八三九〜一九二二）は、旅籠元問屋の主人。書画・俳諧・和歌・插花・謡曲等に通じた風流人だった。

沼津市明治史料館通信 第63号

編集 沼津市明治史料館

発行 沼津市明治史料館

千410 沼津市西熊堂三二二一

電話 〇五五九一二三三三三五

FAX 〇五五九一二五三〇一八

http://www.city.nunazu.shizuoka.jp/sisetu/meiji/index.htm

史料館はタイムカプセル史料を未来に伝えます。古い家や蔵・物置を取り壊すとき、蔵書などを処分しようと思ったときなどは是非報下さい。

沼津市は11月1日より特例市になります。

依田三千作とは、沼津上土町で阿国屋の屋号で郷宿を営んだ依田家（利兵衛・治作を襲名）の人で、大正十五年（一九二六）七十歳で亡くなった治作（戒名大観一峰居士）の幼名と推測される。

渡辺常治郎は、八郎左衛門を襲名し原宿の間屋をつとめた家の当主。明治十一年（一八七八）には八十八歳の売茶東牛を迎え、一家そろって煎茶を楽しんでいる（渡辺八郎家文書O-8）。